

夏季福音特別集会 第1回

## 人新たに生れずば——ヨハネ伝

2017年8月25日(京都KKRくに荘)

集会員が自覚すべきこと キリストの弟子としての自覚を ヨハネ伝を「身読」する ヨハネ伝の伝道記事は短い 独り立ちのために 福音の継承 ゼロ・イコール・無限大(0=∞) バプテスマのヨハネの証し イエスの弟子たちの召命 人の子は物理法則を乗り越える ニコデモとの対話 新しい誕生 永遠の生命とは 神は独子を賜うほどに 天の次元と地の次元 主さま、有難うございます 盛んなるイエス わが愛に居れ 「どっこい」で生きる

### ●集会員が自覚すべきこと

皆さん、こんばんは。今回、私は特別集会の御案内という長い文章を書きました。これを真剣に読んでいただいたと思いますが、そうでなかったら困るんです。普通の特別集会といった気持ちではありません。

そうじゃなくて、私たちが如何に危機的状況にあるか。例えば、私が今、突然いなくなつたとします。その時、この集会はどうなるんですか？

「ハイ、私がやりますよ」

と、続々と手を挙げて。まあ、挙党態勢も良いけどね。

「船頭多くして船、山に登る」

では困るから、ここは長老から順番にやつてもらおうとかね。まあ、そんな話になるのが当たり前なんであって、先生がいなくなつたらどうしようなんていうのは、とんでもない話なんです。私は皆さん一人びとりが、そういう気持ちでキリストに連なつていらつしゃるということはずつと願つてきました。その一端が、このご案内の中にも書かれています。

《①特別集会を開催する主体と趣旨》

②特別集会の「主題」(対象)と「宿題」

③主題は「ヨハネ伝福音書を身読する」

案内書の1ページの下から3行目の所に、

いわゆる『キリスト教国』ではない日本において、『異邦人』である私たちは、社会においても、キリスト教の世界においても、少数派、辛子種一粒のような『微小』な存在です。だからこそ余計に、上に述べたような問題、課題を常に自覚して、「狭き門・細き路」を歩むという宿命を負っています。《

自分達は、いつたい、どういう者として召されているのか、自分達はどういう使命を担っているのか。単に個人の信者としてだけでなく、集会というものの中で、自分はどうい



う役割を担っているのか、そういうことを常に考えざるを得ない。少数民族というのは、ぼやぼやしていたら消えてしまうんですから。ということは、一人びとりがそれだけの自覚を持たないと成り立たないという、そういう危機的存在であるという自覚です。

だから、大きな組織の中にいると安泰ですよ。そこに所属していたらいいんですから。でも、我々は、真反対なんです。小池先生も

「二人びとりが担っていく。一人一召団という気持ちで召団を支えて欲しい」

ということをおっしゃいました。だから、そういう自覚を持たないと、この召団のメンバーとしては務まらないんです。楽うつくしたければ大きな所に属せば楽できます。でも、ここはそういう所ではない、楽できない所へ皆さんは引きずり込まれてしまったから。これはもう諦めないといけない。キリストが皆さんを捕まえて、

「お前はこの道を行け、これがお前に託する使命だ。わかったか」

「はい」

と。

### ●キリストの弟子としての自覚を

我々の信仰は、難しい事を信ずるんじゃないんですよ。キリストが言われた事を「はい」とそれだけなんです。アブラハムをなぜ神さまが喜んだかという、「はい」と言っただけなんです。

「お前の子孫は空の星のようになる」

「はい」

と。それを義とされた。あんなの簡単だと思えますよ。何一つ、自分に損なことは無いのですから。お前の子孫は空の星のごとく増える。不可能な事だけど、ものすごくありがたい話なんです。「はい」と言えます。けれど、我々が「はい」というのは、ありがたいばかりの話じゃない。

「茨いばらの路を行かすぞ。それでも伴ともいてくるか」

と。パウロがそうでしょう。パウロは、キリストにひっくり返されて、

「お前は大変な路をこれから行くんだ、覚悟しときなさい」

と言われた。当時、パウロはキリストに逆らい、キリスト教徒を迫害していた。殺害の息を弾ませながらダマスコに向かったと書いてあるでしょ。キリストは何と言われたか、

「何ぞ我を迫害するか!」

と言われた。つまり、弟子の一人びとり人に対する迫害は私自身に対する迫害だと言われた。ということは、今だって、あなた方一人びとりはキリストを背負っているわけです。あなた方一人びとりを迫害する奴は、キリストを迫害しているわけです。キリストが戦われるんです。それだけの自覚を皆さんお持ちですか。ここに属する者はその自覚を持たないと、



このメンバーじゃない。

「そんなしんどいのかなわんわ」

と言うなら、それは辞められた方がいい。でも、それだけの自覚を持っていれば、あの頼り無かった弟子たちが素晴らしい弟子たちに変貌したように、一人びとりを本当に素晴らしいキリストの証人<sup>あかしびと</sup>として変貌させてくださる。キリストは、放っておいたりはしません。そこまで頼って来るやつをほおっておくものか。

「このチンピラ一人にやった奴は、おれにやったんだ」

とまあ——やくざのセリフですみません——親分とはそういうものでしょ。チンピラをなぶりものにする者は、親分である私に対する反逆だ、おれが受けて立つぜと。何もあの世界を讚美しませんよ。でも命がけというのはいくつものそういうことですよ。命をかけるんですから。皆さん、それだけの気持ちが無かったらキリストの弟子じゃないですよ。

キリストは自分の命を十字架にかけてくださった。しかもそれは、キリスト自身に何も理由がなかった。自分の理由で十字架にかかるのは、これはしょうがない。自分の払った罪の値はこれを刈り取る、みんな播いた種を刈り取るんです、この世の中は。だけどキリストは、刈り取る種なんか何も無いんです。キリストは祈っていれば栄化して向こうに行ってしまうお方ですよ。それが、我々の反逆、それを全部ご自分のものとしてひっかぶって、

「あの者たちを赦してやってください、私が代わりにになりますから、この者たちも赦してやってください、私が代わりにになりますから」

と言った。さんざん悪い事をした十字架上の悪人も、

「せめてこうやって十字架の上で、ご一緒出来たのも何かのご縁かもしれないませ  
ん。あなたが御国にお入りになる時は、こんなやつが居たことをどうぞ覚え  
てください」

と。それだけの一言で、キリストは

「今日、なんじ我と共にパラダイスに在るべし」

と言われた。そういうお方なんです。

そういうお方に迫られて、命がけになれない人間は人間じゃない。人間というのはそれだけの尊い存在なんです。愛に対しては愛をもって応える。信に対しては信をもって応える。それを妨げるのがサタンです。だからそれを妨げるのはサタンに操られている。サタンの力から解き放って、我々を本当に神の子らしくしてくださったのがキリストなんです。

### ●ヨハネ伝を「身読」する

ヨハネ伝の中に、

「神の子となる権を与え給えり」(ヨハネ1・12)

という。ヨハネ伝は昔の事が詳しく書かれています。けれども、今、現在成就しているん



ですよ、キリストの時代にはまだ成就していなかったことが。キリストが生きておられる時に成就していなかったことが、キリストの十字架、復活、昇天、そして聖霊降臨、ああいった事態を通して現実化したんです。われわれはその中に居る。2000年経とうが、そんなの関係ない。永遠とはそういうものです。いわゆる時間で測れない、質的なものなんです。だから、あの2000年前に書かれた文字、そしてキリストの業績、事態、そんな事がいろいろありましても、それを現在化して、今に活き活きと私の中で、貴方の中でそれを甦らせてその現実<sup>しんじつ</sup>に生きていく、これが本当にヨハネ伝を読むということなんです。

私は、ヨハネ伝を身読<sup>しんどく</sup>しようと言いました。身で読むとはどういうことですか。それは自分が追体験するということです。自分の中でヨハネ伝の事態は生きています。主さま、あなたは2000年前のお方じゃなかった。2000年なんかあなたの次元では問題じゃない。永遠とはそうなんです。何千年経とうが、そんなの関係ない。我々の経験法則でいえば、「2000年は遠いなあ、遠い昔だったなあ」

「主の御前には一日は千年の如く、千年は一日のごとし」(ペテロ後書3:8)

とペテロも言ってます。

まあ、そういうレベルで聖書を本当に自分のものとして読んで、それを生きる、これが身読することなんです。「身読」とは小池先生が言われた。

皆さん、それをやってますか。日頃からやらないと特別集会だけでやりましても無理ですよ。いきなり練習していい人間が甲子園に選ばれて行っても全然役に立たない。やっぱり日頃からあれだけの苦しい練習をして勝ち抜いて、やっと甲子園に出てそして戦える、というのが高校野球ですよ。

私は、今まで小池先生の夏の特別集会に出席してきましたが、それが群馬県の鹿沢<sup>かざわ</sup>で開催されるようになると、それに出席するにあたって、鹿沢は甲子園だと思っていた。一年かけて今度の鹿沢は勝利したいと思っ行って行っても、いつも負けて敗退、一回戦敗退で涙を飲んで帰ってくる。そういうのを繰り返していました。

みんなワーと一斉に大声を出して祈りに入っていくのに私は入れないですよ。みんなワーとやるでしょ。覚めちゃうんです。それで私は、

「ああ、自分だけが取り残された、またアカンかった」

と、いつもしょんぼりとして家に帰って来るんです。だから、特別集会の最後の司会をやる時、私は残念の弁を述べるんです。

「今回も私は敗北しました。きつと来年は、また出直して甲子園を目指してやって

きます」

するとそこで勝利できなかった人たちが皆、慰められた。一方、ぶっ倒れたりして、ワー喜んでいた人は今、集会に残ってません。一時的な、いわゆるパッション、熱情、そ



んなものでは続かない。ほんとに、石にかじりついてでも、

「主さま、貴方をおいて他にどこにも行きようが無いじゃありませんか」

と。あのヨハネ伝6章63節の所で、

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、

生命なり」

とおっしゃった。そのとき、多くの弟子が去って行った。残った弟子たちにキリストが、

「お前たちも去ろうとするか?」

と言われた。そしたらペテロが何と言いましたか。

「あなたをおいて他にどこに行きましようか。あなたこそ神の御子、永遠の生

命の言葉をもっておられるのはあなたです」

と言っている。そういうところをぱつと皆さん捕まえられましたか。ヨハネ伝を通して読んでほしいのは、そういうことだと私は言いたかったんです。聖書のそれぞれの所において、

「あつ、これだ。ここだ」

といつてつかまえていく。

### ●ヨハネ伝の伝道記事は短い

今日の皆さんにお送りした集会プログラムは、ちゃんと今日の講筵は、

「人新たに生れずば」

となっておりますね。ヨハネ伝の1章の初めのところは除けまして、途中の1章の19節あたりから17章までです。そこまではキリストの伝道の記事です。

その中でも、伝道なされたのは12章までです。13章は足を洗われたところでしょう。14章、15章、16章は訣別遺訓と言われています。弟子たちに対してこんこんと、自分亡き後の事をおっしゃっているところなんです。そしてキリストがなされた御業みわざというのは、だいたい1章の19節くらいから出てきているだけなんです。12章の、

「一粒の麦、地に落ちて死なずば」

あそこで、世間に対するイエスの伝道は終わっている。そういうふうな割に短いのですね、ヨハネ伝の伝道というのは。

そういう中で、ヨハネ伝全部をやるといいますから、この集会で。めちゃくちゃな話ですよ。我ながらつくづくと思いました。しかし、やろうと言ってやった以上は、何かそこに残るもの、皆さんの中に根付くものが無いといかん。

### ●独り立ちのために

ほんとに特別集会というのは、語り手がお話をして、ああ良いお話を聞いたという独演会——小池先生の時はそうかも知れませんが、レベルが違いますから——でも、私はそうじゃ



ない。私は聖書を生きている人間なんです。日々の生活の中に聖書を生きようとしている人間です。皆さんも同じでしょ。どこが違うんですか。先生は学者だからという。法律学者ですよ、聖書学者ではありません。そしたら、何も変わらないですよ。ただ、24歳の時からやって来たという点では60年経っていますから、年期は入ってますわ。そりゃ仕方がない。でも、それ以外は皆さんと同じように、悩みながら悩みながらきた。しかも、法律学の学者というのは、ほんとにしんどい職業なんです。我々の科目の民法というのは、司法試験を通すように、隅から隅まで教えないといかん。学者としての研究は要求される。民法は条文が一番長いところなんです。歴史もローマ法にまでさかのぼって大変だし。そういうものをやりながら、しかも小池先生に、

「40歳になったら独り立ちしなさい、いつまでもI先生のアシスタントをやっている場合じゃないよ」

と言われて、乗せられ易いんですね、私は。騙され易い人間です。それで、「はい」と言っただけで、やりだした。そしたら直ぐ大学紛争でしょ。まあ、しんどかった。その時、N君は4年生で、よう頑張ってくれた。何処の派にも属さない独立した数人で、ステートメントを発表して、すごかった。そういう時代があった。

要するに、私は皆さんが一人ひとり、本当に独り立ちして、

「たとえ奥田がいなくなろうと大丈夫です、召団は未来永劫永遠に続いていきます」

という気概をもって、気概だけでなく中身も持って、それを現してほしいんです。私は特別集会ごとにそれを願っています。今回もそうなんです。

「わたしなんか……」

なんて絶対言ったらいけません。そりゃもう、キリストが皆さん一人びとりを捕まえられたんですから、それに耐えない人はここから放出されますよ。プロ野球だって、あるでしょ、「戦力外通告」とか。だから皆さん、戦力外通告なんか絶対受けないで、キリストの大切な戦力、キリストの集まりですからね。小さなキリストの集まり、一人びとりは「小キリスト」なんです。その小キリストが、個性が豊かでありながら、しかし一つである。

「一即多」

と小池先生は言われた。一つでありながら多だ、多でありながら一つである。これはヨハネ伝17章に出ています。

「これ皆一つとならんためなり」(ヨハネ17・21)

と。

### ●福音の継承

これは今朝、思いついたんです、「十字架」のここ(横線と縦線のクロスしている所)の点を。「点」というのは個人なんです。われわれ個人です。でもこの個人というのは、ひとりでに



個人としてポツンと生れたんじゃない、必ず御先祖がおりました。

御先祖の上はアブラハムかも知れませんが。そうでしょう。地球が、人類が減びるまではつながっていきます。この縦の線というのは、皆さん一人ひとりにあるわけです。

もちろん上から受けたから。内村鑑三、藤井武——いや、その前にもっと居たでしょう、歴史的にはルッター、もつと上はアブラハム——それから小池辰雄、奥田と来て、その後皆さん。ずっと次の世代に継承して行っていたかどうかという縦のラインがあります。

それから横線は何でしょうか？ 横への広がり、これは仲間ですよ。我々は後の世代に福音を継承していく任務を担っている。現代の世代です。われわれは小さなグループを作つて閉じこもっているのではない、とにかく福音を述べ伝えなさいと。キリストは福音を伝えると言われた。そのためには「御霊」の導きがいります。

使徒行伝の最初に、

「然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力を受けん、而してエルサレム、

ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん」(使徒行伝1:8)

と出てきます。だから力を受けるまでは留まって祈っておれと。そして、五旬節の時に聖霊が降つて来た。それから始まったわけです。

まあ、そんなふうにして横への広がり、それは同時代人に対する世界的広がりです。世界に羽を伸ばしなさいと。広がり、それからずっと未来永劫に人類が続く限りは福音という生命を伝えていきなさいと。それはあなたの方がアブラハムから始まってずっと受け継いできたものである。霊統というのは、何も種族としての人間の種じゃない。「霊」「霊統」というものを私たちはアブラハムの昔から受け継いでいる。しかもキリストは、

「我はアブラハムよりも先にあるなり」

と、ちゃんと申しておられるでしょ。アブラハムは私(キリスト)を見て喜んだ。ユダヤ人は、

「お前は50歳にもならないのにアブラハムを知っているのか」

と言った。キリストは、

「アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり」

と言われました(ヨハネ8・56以下)。

そういうふうには、ずっと悠久の昔からずっとつながって、私、次いで皆さんに来て、それがまた次の世代へと継承されていくというこの縦のつながり。それから

「全世界に福音を述べ伝えよ」

と言われた横のつながり。

この十字架ですよ！ こんな図は、今朝、初めて、気が付いたんです。

「我々は十字架である」

と。「十字架を負いて我に従え」とはそういうこと、しんどいではない。嬉しいんです。

「十字架を負いて我に従え」



とはそういうふうにして、

「永遠の真理、生命、永遠の生命を伝えていきなさい、未来永劫に伝えなさい。そしてたら横の線、世界中に地球上に広げていきなさい」

という。横の広がりや縦のラインと、これをその交わっている真ん中に、皆さん一人びとりがいらっしゃる。またキリスト召団が居るわけです。そういう位置付け、すごいじゃないですか。そういうことを私は申し上げたいと思います。

### ●ゼロ・イコール・無限大（ $0 \parallel \infty$ ）

霊統からいうとアブラハム、後ほどモーセが出てきます。それからイエス、それから使徒たち、こういうラインです。アブラハムとイエスの間にモーセが入って来たという、これまた意味が深い。アブラハムは「信仰の父」と言われているでしょ。ローマ書を見ても、アブラハムは信仰の父なんです。だからアブラハムに直結したらいいのに、間にモーセという邪魔ものが入って来た。だから、ローマ書とかガラテヤ書を読んだら、そのところは、なぜ邪魔ものが途中に入って来たかということがちゃんと書かれています。

私の理解、解釈ではやっぱりモーセというのは自律人間なんです。ただ、子どもみたいに、「はい、はい」と従っているんじゃないやなくて、自分で考え、自分で判断し、主体的に行動する、それが人間だ。今の教育そのものですね。

自己決定をしなさい、自律しなさいと。ところがキリストは全然だめ、ゼロ。

「私は自分の意思を持ちません。私は自分から何も出来ません」

と、ヨハネ伝5章にちゃんと出てくるでしょ。そのゼロが無量大。小池先生の数式です。

「 $0 \parallel \infty$ 」（ゼロ・イコール・無限大）

ゼロに徹したから無限無量が展開した。人間はゼロに徹しないから有限なんです。だからやっぱり小池先生ってすごいね、

「ゼロ・イコール・無限大」（ $0 \parallel \infty$ ）

なんて。キリストは、

「私は何もできない、自分から教えることは何もない。全部、父が私の中で

御業をなさっている」

と。だから

「私を見た者は父を見た」

「我と父とは一つなり」

と言われた。それがパリサイ人、宗教家の逆鱗さかきりんに触れて、神を冒瀆ぼうとくするものとされた。それから安息日に病人を癒されたでしょ。パリサイ人は、安息日はどんな仕事もしてはいかんと言った。キリストには、安息日は神の愛の働きに委ねる日でしょ。

「自分は神の愛に突き動かされて病める人を癒した、何が悪いか」



と言われた。それは彼らには通用しない。そういうモーセを頭とする自律人間は、そうやって神さまの愛を拒んでしまった。自分で自己決定をして、何でも自分で判断する。律法というのは、与えられたが、キリストは律法を突き抜けて、律法の根本精神、神さまの御心、愛、それを受けとって神さまと一つになられた。ところがパリサイ人たちは律法を己が物として、自分の判断で、

「俺は律法を守るんだ」

とやっているから、神さまの愛から外れたわけです。まあ、そういう躓きが途中に入りました。ローマ書なんかでは盛んに、

「我々はアブラハムに帰ろう、アブラハムの信に帰ろう」

と言い、「信仰の父アブラハム」と盛んに言っています。歴史的にはそんな事になります。

### ●バプテスマのヨハネの証し

今日の本題は、ヨハネ伝の3章までを予定しております。とにかくこの特別集会で17章まで行くんですから大変なことですよ。青年というのは冒険をするんです。

「私は青年ですから、冒険をします!」

なんて(笑)。いや、前提は、

「皆さん読んでみてくださいいいね」

と言っているんだから、

「今初めて見ました」

なんてことは通用しないですよ。聖書の箇所も、

「ああ、ここですね。自分もそう思いました」

そういう反応が返ってきて当たり前なんです。それが前提になっています。

だから大学でも、本当の授業というのは、徹底的に予習、復習をやってきていることを前提にしてやるんです。すると短い時間でも充実します。ところが、「今初めて聞きます」なんていう学生がいて必死にノートをとる。そんなのダメです。

ところが、ここは皆さん優等生(笑)、

「ちゃんと先生の思う以上に準備をしてみました。そういうふうには思わないのは

我々を信用してないんですね」

と、皆さん言うくらいであって欲しい。

それじゃあ、ヨハネ伝に入りましょう。私は1章19節からと言いました。というのは、18節までは最後のまとめですから。19節からが地上を歩まれたイエスのお姿が出てきているわけです。ユダヤ人が洗礼のヨハネ、バプテスマのヨハネの所へ行く。バプテスマのヨハネのことは1章15節です。

「ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、



我より前にありし故なり。』と、我がかつて言えるは此の人なり」

と言って、既にキリストの事を紹介しているわけです。

さて、そういうバプテスマのヨハネに対して、祭司とレビ人がヨハネに、

「あんたがひよつとしたらキリストなのか？」

と聞くわけです。ヨハネは、

「いやそうじゃない、自分は荒野に呼ばれる者の声だ」

と言いました。祭司たちは、

「じゃあ、何で水で洗礼を施しているんだ」

と。それに対してヨハネは、1章26節、

『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に汝らの知らぬもの一人たてり。即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず。』これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりしヨルダンの向いなるベタニヤにてありしなり」

明くる日、ヨハネのもとにイエスがやって来られた。

「ああ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」

と。バプテスマのヨハネはこの1章のところで大事なことを二つ言っている。一つは、「世の罪を除く神の羔羊」ということ、それから、「聖霊によりバプテスマをほどこす方」。この二つを1章で言っています。これに注目していただきたい。ですからこの1章29節で、

「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」

こう言っています。それから、1章33節に

「これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」

と言います。1章のところで二つ言っている。世の罪を除く神の羔羊、これ十字架でしょ。それから聖霊にてバプテスマを施す、これは復活の生命を与えることですよ。キリストの甦りのいのち、聖霊さまを我々にくださる、聖霊のバプテスマをしてくださる。この二つの、「十字架」とそれから

「十字架を突破しての復活の生命」

キリストが本当の御霊のいのちに我々を活かしてくださるお方であること、それをヨハネはここではつきりと宣言しているわけです。

### ●イエスの弟子たちの召命

それから少しヨハネ伝を行いますと、今度はピリポ、アンデレとか、そういった弟子たちとイエスの出会いが出てきます。ちよつと読んでいきましょう。35節から読んでいきます。「明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて……」



これ洗礼のヨハネです、

イエスの歩み給うを見て言う『視よ、これぞ神の羔羊<sup>こゝろつち</sup>』。かく語るをきききて、二人の弟子イエスに従いゆきたれば、イエス振り反りて、その従いきたるを見  
て言い給う。『何を求むるか』』

イエスは出会う人に、

「あなたは何を求めていますか、私に何をしてほしいか？」

と聞いておられるんです。目の見えない人に対しても、「何を求むるか」と。

「はい、目が見えるようになることです」

「はいわかった」

と、まあそんなふうには、常に何をしてほしいかと聞いておられます。

『ラビ(師) いづこに留り給うか』』

「あなたの所在をつきとめたいんです」というふうなこと。

「イエス言い給う『きたれ、さらば見ん』』

よっしや、お出でや、

「彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろな  
りき」

今の午後4時ごろです。

「ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟  
アンデレなり。この人まづその兄弟シモンに遇い『われらメシヤ(釈けばキリ  
スト)に遇えり』』と云いて、彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を  
とめて言い給う。『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケバ(釈けばペテロ)と  
称えらるべし。』

明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポに会いて言い給う『われ  
に従え』ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。ピリポ、  
ナタナエルに遇いて言う。『我らはモーゼが律法に録ししところ、預言者たち  
が録しし所の者に遇えり、ヨセフの子ナザレのイエスなり。』』(ヨハネ1:40)

「救い主に出会ったんだよ」とピリポはナタナエルに言いました。ナタナエルは、

「ナザレからまともな者が出るはずがないじゃないか」

こう言つて相手にしなかつた。ピリポは

「いや、来りて見よ」

と言つた。「来りて見よ」というのはいいですね。

「あんた、自分で確かめてごらん、私の言うことが信じられんなら来て見てごらん」

と。我々の集会もそうなんです。皆さんが、いろいろ集会の事を聞かれたら、ある程度



ご説明なさって、それ以上は

「来りて見よ。集会に来てごらん、そして自分の目で確かめなさい」

と。サマリヤの女がそうでした。サマリヤの女は非常に感心して、水がめを置いたままとんで行つて人々に、

「すごい人に出会ったんだよ」

と知らせた。そしてらみんなゾロゾロやつて来た。やつて来てイエスの話を聞いて、非常に感心して、なんて言つたか？

「あんたが言つたからではないよ。俺たちは自分の耳で聞き、自分の目で確かめて感動したんや。だからこの方に留まっていたらだくんや」

と。そして2日間、イエスは余計に泊られた事が出てくるでしょ。(ヨハネ伝4章)

イエスは、ナタナエルが自分のところにやつて来るのを見て、

「おまえは本当のイスラエル人だよ、おまえは正直者だ」

と言つた。そしてらナタナエルが、

「何で私のことをご存知？」

と言うと、イエスは、

「ピリポが呼ぶ前にお前さん無花果いちじくの木の下に居たのを見たのだよ」

と。イエスは透視の効くお方ですから、ちゃんと見えるわけです。そしてらナタナエルはすっかり感動して、

「あなたは神の子です。イスラエルの王です！」

そこでイエスは言われた。

「お前が無花果の木の下に居た事を言っただけでそんなに驚くのか。更にすごい事を見るよ」

### ●人の子(キリスト)は物理法則を乗り越える

その次が素晴らしい。ヨハネ伝1章51節、

「天ひらけて、人の子のうえに神の使つかいたちの昇り降りするを汝ら見るべし」

いや本当に見たかどうか知りませんよ。でも、イエスの上に天使たちが昇り降りしている。私はイエス御自身が昇り降りしていると思う。元々、天の次元に居られた方が地に降つて来られたでしょ。祈つておれば靈化して、また靈の次元に戻つて向こうに行こうと思えばいつでも行ける方でしょ。だから天使たちが昇り降りするどころか、イエス御自身が昇り降りされるかもしれない。私はそんなふうにあります。

だから、イエスが水の上を歩いて来られることなんか、当たり前のことなんですよ。祈つておれば靈化してしまう。靈化してしまつたら、水の上だつて何だつてナチュラルなんです、靈の次元においては。物理法則を乗り越えた、そういつた姿に變貌しておられると思う。



それは山上で祈っておられたら変貌して、モーセとエリヤが現れたでしょ。ああいった事はイエスが祈られたらいつでも起こり得るんです。でも、イエスはそういうことはめつたに人々には現わされなかつた。だから、よく一人で山にこもって祈られたとあるでしょ。そういう時は、何かそんな事が起こっているかもしれない。人がその場に居合わせないから、伝記に書けないわけです。私はそんなふうには読むんです。

それから2章の所では、カナの婚礼。婚宴の席でぶどう酒が無くなってしまおうという大変なことですから、そこで婚礼を祝福して水をぶどう酒に変えてくださったという、お話が出てきます。これは「第一の徴しるし」と書いてあります。

その次は宮清め。大学紛争の時にゲバ棒を持った学生たちに

「暴力はいかん」

と言ったら、学生が

「イエスだつて暴力をふるつた」

と、この聖書の箇所を引つ張つて来るんです(笑)。彼らはああいう所だけは読んでいますね。弟子たちは

「汝の家を思う熱心、我を食くらわん」

というのを思い出した、なんて書いてありますよ(2章17節)。それから3日のうちに宮を建て直す。自分の体、御自身の復活の体の事を言われたとか、そういった事が2章では出てきまして、大事なところは3章です。

### ●ニコデモとの対話

3章の「人新たに生れずば」が今日の主題です。講筵の題に「人新たに生れずば」と書きました。ここは何度読んでも楽しいところなんです。ニコデモは、今の私くらいの年なのか、もう少し若いのか、60歳位かしら、大変な学者でもあります。ユダヤ人の幸つかさとありますからリーダーなんです。ユダヤ人のリーダーたる者がイエスの所に真昼間、堂々と会いに行くのは立场上、これダメなんですね。

だから、夜こっそりやつてくるわけです。この辺、ニコデモはちよつと可愛いなと思います。しかも、来るや否やおべんちやらを言うわけです。

「あなたは神さまからおいでになつたお方です。神さまがご一緒でないと、あなたがなさつていらつしやるいろんな徴しるし、

まあ、カナの婚宴のこと、他にもいろいろあるんですよ、

そんな徴は出来るもんじゃありませんよ」

と。ニコデモは正直にそう言つたんですよ。私はあなたを尊敬しています。何とかあなたにお会いしたくてやつて参りました。ただ、真昼間でなく夜で御免なさい。立場がありますものですから。まあ、そういうわけです。ところがイエスは言われた。



「人あらたに生れずば、神の国を見ること能わず」  
それからもう一回言われた。

「人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず」  
「肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり」  
そして、

「風を見てごらん、何処から来てどこへ行くのかわからない。けれども、風が吹いていることだけはわかるだろ。」もう一度お母さんのおなかの中に入るのですか」などとあなた言ってるが、そんなんじゃないんだよ」

しかし、how(いかにして)、これは謎だよと。見えない世界です。神さまの御業ですから。「上より生まれなければ、水と霊とにより生まれなければ」という言い方をされている。

「肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。なんじら新たに生るべしと我が汝らに言いしを怪しむな。風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯くのごとし」

### ●新しい誕生

いわゆる人間的な理性的な理解、それを超えた世界だ。人間的な世界では、お母ちゃんのお腹の中から「おぎゃあ」と生まれてくる。誰でも経験することです。ところが、そういう「おぎゃあ」と生まれた自然人、肉体をもった我々人間というのは、それだけでは神さまの永遠の次元の命とは無縁なんです。

ところが新たに生まれれば、たとえ肉体は土の中に消え行こうと、肉体がポロリと、ちようどセミの殻がポロリと外れたようになって、中の本当のいのちは翼を張って天に昇って行く。そういう外側の人間の中に、それがポロリと外れたときに、天に昇っていく霊のいのち、これを持たないとダメなんだと、それをキリストは言ってくれました。

「人新たに生れずば」  
と。ここで「新たに生まれる」とは、

「もう一回お母ちゃんのお腹の中に入り込んで、もう一回出てくる、そんなレベルではないんだよ」

と。でも、ニコデモは正直なんです。霊の次元のことを全然知らないんですから。この人たちは旧約聖書を勉強して、律法を知っています。精通してはいますが、霊の次元、それは無縁だったようです。だからいきなりキリストは、

「人新たに生まれずば神の国に入ること能わず、見ること能わず」  
と、つまり神の国に入るとか見るとかは、全然ニコデモの世界には無かったことなんです。



でもいきなりキリストはそれを言われた。

「神から来た教師、そんなことはどうでもいい。人間というのはもう一回、新たな新しい誕生、霊の次元に生まれれば、私がやっていることが皆わかるよ。神の業がわかる。神の次元に自分の霊が入らないと、神さまの事態はわからない、前提が間違っているよ」

と。ニコデモはドギマギしてしまって、こういう問答をやっているわけです。

「人新たに生れずば、人は水と霊とによりて生れずば」

と、要するに我々の第一の誕生、母の体内から出てくる第一の誕生。その人間は如何に150歳の命を生きようと、それはそれだけである。霊の、神の次元とは絶縁状態にある。我々の生まれながらの人間の事態と、神さまの次元とは、本当にそれこそ天と地の差がある。ところが、その天から降ったお方が、

「天の次元をお前たちにあげる。天の次元を受けとってごらん。お前たちは死なな  
いよ、永遠の生命だ。永遠の生命とは天の次元に生きる生命だ、それを私はあげ  
たくてやって来たんだ」

と、これがキリストのおっしゃりたかったことなんです。

### ●永遠の生命とは？

ニコデモが答えた。

「こんなことはあり得るんですか」

イエスは答えて言った、

「あんたはイスラエルの先生だろ、指導者だろ、こんな初歩的なことが、

神さまの目から見たら初歩的なんでしょうね、神の次元から見たら。

神の次元に関するこんな初歩的な事がわからないのか。

自分たちキリストと、預言者も含まれるかもしれませんが、

私たちは知っていること、経験していること、それを当たり前のように話している。ところがあんた方はそれがわからないね」

と。

「地のことを言うに信ぜずば」

とありますが、キリストはあまり地のことをおっしゃっていないので、ここは意味がよくわかりませんが、

「たとい自分が地のことをとやかく説明してあげても、あなた方はなかなか受けとらない。そしたら、いわんや天の神の次元、霊の次元などわかりっこないと。そして、

「<sup>13</sup>天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。モーセ荒野



にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし」

これが十字架なんです。モーセに導かれたイスラエルの民が、神とモーセに向かって逆らい、つぶやいた時、神は火の蛇を民のうちに送られた。多くの民が蛇にかまれて死んだ。民のために祈ったモーセに対して、神は火の蛇を造って、それを竿さかの先に掛けるように命じられ、

「それを仰ぎ見るならば生きる」

と言われた。そこでモーセは青銅で一つの蛇を造り、それを竿の上に掛けて置いた。すべて此の蛇を仰ぎ見た者は癒されたという(民数記第21章4〜9節)。蛇は呪いなんです。つまりここでも十字架が暗示されている。

「私(キリスト)は呪われる者となって十字架にかかる、それによってあなた方は生命を得る」

それをイエスはここで言っておられる。

「14 モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。15す

べて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり」(ヨハネ3・14〜15)

ニコデモの話からこんなすごいところへ展開していく、ニコデモはわかるはずはないと思いますけど。しかしやはり、イエスはニコデモを見込まれたと思う。ニコデモは、また後で出てきますが、パリサイ人たちの中で、

「先ず本人(イエス)の言うことをしつかり聞いて審くことにしよう」(ヨハネ7・

50〜51)

と言っています。パリサイ人はニコデモに、お前もとうとうイエスの弟子になったのかと言つて揶揄やゆしていますけどね。

ですからこの3章のところは、「人新たに生れずば」という話から始まって十字架まで出ているんです。ということとは、私たちは十字架を通らなければ新たに生まれられないということなんです。座禅して天の次元に入れない、座禅して新たに生まれれない。われわれは十字架で古き我を

「われ主と共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず」

と十字架で死んで、そしてキリストの復活の生命を恵みとしていただいて、初めて神の次元、天の次元の人、御霊の人に変貌させられる。キリストはそのために来てくださった。

永遠の生命いのちとは、そういう人がいたでいてる生命のことをいいます！

肉体の生命で永遠に生きるなんて、そんなの嫌ですよ。腰が曲がって、杖ついて、「舌切雀のお宿は何処だ」なんて。

我々に永遠の生命をくださるために、人が新たに生まれるために、イエスはこれだけの犠牲を払ってくださった。ここに十字架がもう出て来ている。

「ヨハネ伝には十字架が無い」

なんて言う人が学者の中にあるようですが、「それは上つ面を見ているだけですよ」と私



は言いたい。

「モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし」  
と。十字架にかけられ呪われる。

「それを『はい』と受けとる者はとこしえの生命を頂く。それは私の復活の生命、  
聖霊の生命、これをあげるんだから」  
と、そういう深い愛の隠された言葉です。

●神は独子を賜うほどに

だから、次の16節につながるんです。

「<sup>16</sup>それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり」(ヨハネ3・16)

十字架にかけて、キリストの生命と引き換えに、キリストの受くべき永遠の生命、復活の生命、それを代わりにくださる、そこまでして神は我々罪びとを愛してくださった。

「それ神はその独子を賜うほどに」

と。もしキリストが地上でいろんな恵みの業をなさり、そして最後は神さまから、

「おお！ ようやってくれた。御苦労、御苦労、さあお出で！」

と、パーッと変貌して天に行かれたら、そりやもうキリストも幸せですよ。けれども、そうはいかなかったわけです。

「かぐや姫」はスーッと天の国に行きましたよ。

「私はお月さんから来たのでお月さんに帰らなければなりません。おじいさん、おばあさん、お世話になりました」

それでも、みんな一生懸命止めようと思っただけど、止められなくて、目がくらんで、そして月へ帰って行ったという、あれはめでたいお話ですけど。でもキリストは、天から来られて神の独子として愛そのものを顕し、父の御心を100%顕した。「まぶねの中に産声あげて」、あの由木康さんの121番の讚美歌にありますように、ああいう生き方をなされた。

そして、挙句の果ては十字架でしょ、こんなひどい話はありませんよ。ゲッセマネで祈り抜かれた、あのお気持ち、ほんとは栄化して、すぐ神さまの御許に行けるそのお方が、我々人間が背負うべき業を担いきって、それに対する審判を受けられた。これは義の神さまですから、「ああ、よしよし」で赦せなかった。

十字架はまた、義と愛がクロスしている処です。横線は愛です、縦線は義です。神さまの義は貫かれる。それを横線のキリストはしっかりと受け止めて、

「自分が審きを受ける。しかし、生命は彼らに与えてやってください。彼らの罪は

私が全部引き受けます」

と。そういう十字架の横棒は担いの愛です。

縦棒は義の貫きです。神の義の貫きをキリストが受けて、我々の受くべき審き全部を引



き受けられた。そしてその代わりに、キリストが受くべき永遠の生命、復活の生命、聖霊の生命、そういうものを我々に無条件でくださった。

無条件ということをしつかり受けとって欲しいんです！

条件を付ければキリストの死は「無駄死むだじに」になる。パウロは言ってます。パウロがなぜ割礼に対して徹底的に戦ったかというところ、「恵みプラス割礼」、つまり恵みは恵みで受けながら、

「しかしまあ、割礼も受けておこう」

というそんなもんじゃないと。割礼は律法の象徴だ、律法によつてはどのにもならないと。律法は義の貫きです。

神の愛が義という姿で現れてくる。その前には人間は誰も立てない。それをキリストが真正面から受けとつて、そして貫いてくださった。だから、無条件なんです。受けとること。それに何か条件を付けて、水を割つたりしないという、それがパウロの戦いだつたわけですよ。だから私たちの場合も、この3章の15節、16節にありますように、

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信する者の亡び  
ずして……」

神の義がまともに貫けば、みな滅びてしまう。それをストップかけてキリストが受くべき永遠の生命、或いはキリストの中に息づいている永遠の生命を、彼を「はい」として受けとる者に無条件で与えてくださる。それが神の愛であつた。それがこの3章16節の宣言です。

「<sup>16</sup>それ神はその独子ひとりを賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。<sup>17</sup>神その子を世に遣したまえるは、

世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。<sup>18</sup>彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり」

(ヨハネ3・16～18)

「独子の名」とあります。名は体を表す。名というのは実体そのものなんです。だから使徒行伝の3章ところでペテロが、

「我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め」  
と言っています。

『我らを見よ』と言う。かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、ペテロ言う、『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め。』

ここで「名」というのが出てきました。「名」を信するということとは、「名」をもって表されている本体、そのものを全面的に受けとるといふ、そういうことを意味しております。さらに使徒行伝の3章の15節は、

「<sup>15</sup>生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、我らは



その証人なり。<sup>16</sup>かくてその御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところの此の人を健くしたり。イエスによる信仰は、汝等もろもろの前にて斯かる全癒を得させたり」(使徒行伝3・15〜16)とあります。

「御名を信じ、その御名は、この人を健やかにしたんだ」

と、こう言ってます。だから御名というのは、単にお名前というものではない。名は体を顕しています。名の背後に本体がある、それをしつかり受けとる。だから、御名を信ずるということは、背後の本体たるイエス御自身、そのお方を全的に体で受けとるということ、体受、体得するというそういう事態ですから、そこは間違わないでいただきたいと思います。

### ●天の次元と地の次元

ヨハネ伝に戻ります。3章31節、

「<sup>31</sup>上より来るものは凡ての物の上であり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。」

これは、新たに生まれる前の次元、肉の次元です。それと上なる次元、天の次元、神の次元、それとのコントラストを表しています。

天より来るものは凡ての物の上にあります。<sup>32</sup>彼その見しところ聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず

受けられないんです、あまりにも次元が違いすぎて、トンチンカンな平行線で。ずっと後の所を見ましても、パリサイ人たちとの問答もみなそうです。すれ違いです。しかしながら、

<sup>33</sup>その証しを本当に受けとつた者は、神を真なりとす。<sup>34</sup>神の遣し給いし者は

神の言を語る、神、御霊を賜いて量りなければなり。

これですね、大事なところは。

御霊を賜いて量りなければなり。<sup>35</sup>父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。<sup>36</sup>御子を信受する者は(体で受けとる者は)……」(ヨハネ3・31〜36)

この信受とか体で受けとるといふのは、次の6章のところ、

「我を食らい、我を飲め」

という趣旨の言葉が繰り返して出てきます。

「私は生命のパンである、私を食べる。モーセが与えたパンを食べたけれど皆死んじゃった。しかし、私という永遠のパンを食べる者は永遠に死なない」

と。繰り返して言っておられます、「我を食らい、我を飲め」と。だからここで「御子を信ずる」といふのは、そういう事態ですから、頭の中で信ずるとか、そんなんじゃない。

でも、どうも日本のクリスチャンというのは、私が出会ったクリスチャンは、往々にして頭のクリスチャンが多い。本当に体で受けとっている人にはなかなか出会えない。本当



の御霊のクリスチャンがどの教会にも続々現れたら、もつと変わっていくと思います。この横の広がりがある世界に広がり、そしてこの縦の継承がしっかりと根をおろして受けとられていく、この両方が大事です。縦の線と横の広がり、これはやはり御霊です。説得ではありません、理性ではありません。理性を超えた「人新たに生れずば」というその次元の話ですから。

●主さま、有難うございます

ヨハネ伝3章36節、

「<sup>36</sup>御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、<sup>かえ</sup>反つて神の怒<sup>いかり</sup>その上に止まるなり」(ヨハネ3・36)

何処までも受けとらなければ、それは最後は審判です。さつき

「光よりも暗きを愛したり」

とありましたね、神さまは審かれないそうですよ。サンダーシングなんかを見ましても、人間の魂は死んだら必ず自分の似かよった所、自分の行きたいところに行くそうです。だから、日頃から光ある者と交わっている者は光ある所へ行き、日頃から暗い世界にのみ生きていく人は、光の世界に耐えられないそうです、まばゆくて。全部自分で自分の行く場所を選んでいくという。大体、そういうった死後の世界を書いておられる方は、皆同じようなことを告白なさっている。どうも本当らしい。だから、我々は当然光の所へ行くんですよ、

「光のある間に光を信じて光の子になりなさい」(ヨハネ12・36)  
とキリストは言ってくださっている。

それからもう一つ言いたい。ヨハネ伝を読んで、皆さん、

「はい、全部成就しています、私において成就しています」

そういうふうには読まなければだめですよ。

「2000年前に言われた。いつそうなるんですか。ああ、2000年前の人はそ  
うだったんでしょね」

そんなんじゃない。

「私の中で成就しています。主さま、有難うございます」

と。本当に皆さんそうやって、ヨハネ伝を読むということはそういうことなんです。

「主の愛の御業<sup>みわざ</sup>が私の中で起こっています。あなたは私の為に既に生命を捨ててくださいました。そして甦<sup>よみがえ</sup>ってくださいました」

と。そして、

「聖霊を受けよ」

と、ヨハネ伝14章から16章で盛んに言っておられる。弟子たちに対して、

「助け主を与えるから、祈って待っていないさい」



と言われた。それがあのペンテコステで成就した。その後も脈々と成就しているわけです。「ヨハネ伝に書いてあることは皆成就しています。主さま、有難うございます」と、そうやって読んでいただきたい。そういう読み方をしていた方がいいんです。これは何もヨハネ伝に限らないと思います。他のマタイ、マルコ、ルカでも同じでしょうけれど、どっちかというところ、マタイ、マルコ、ルカは、現実にキリストがなさった御業とか、キリストが人々とのように問答されたのかなど、そういうことがありますから、ついつい、とらわれることがあるんですが、ヨハネ伝は、事柄とかなさった事態とかでなくて、その奥にある、

「ここからお前は何をくみ取るか」

という、そういう問をくみ取っている。それで、

「はい、頂きました。あなたは私の中で生きてくださっています。あなたが願ってくださったことはもう成就しています」

そうやって、キリストが

「聖霊を与えるよ」

と言われたら、我々は、

「もう頂きました、主さま有難うございます」

と言って欲しい。そこまで言うのは勇氣要りますけどね。でも、そうやって受けとらなかつたなら、読んだことにならないんじゃないんですか。そうでしょ。2000年前のものを2000年前に巻き戻して、ここで

「主よ語り給え、僕聞かす」

なんてやっているんじゃないかと、

「もう成就しました。有難うございます。私はその先を行っていますよ」

と。

### ●盛んなるイエス

使徒たちも伝道に行きました。ペテロ、ヨハネも伝道しました。今、日本において、我々石ころみたいな者ですけど、この中に御霊が燃えておれば、昔と同じ御業が必ず起こります。

「我よりも更に大いなる業を為さん」

と、そうやってキリストは約束なさった。だから、起こっているはずですよ。ただ、残念ながら目に見える形で起こっていない。

「目に見える形でもやってください。主さま、お願いします」

そのぐらいに、おねだりして厚かましく祈っていく、それがほんとはじゃないですか。

子どもさんが親にねだるときに、

「買ってくれるまで動かーん」



なんて、足をじたばたさせて、親も

「もう負けたよ、お前には」

なんて。不義なる裁判官も、

「あの寡婦はうるさくてしょうがないから聞いてやるわ」

なんて、寡婦の願いを聞いて裁判をしたと言うのが聖書にあるでしょ。

「ましてや、夜昼呼ばわる選民の為に神は遅くとも遂に審き給わざらんや」

とキリストは言われた。

「落胆せずして常に祈るべきことをたとえて語り給う」

と、ルカ伝にあるでしょ(ルカ伝18章)。まあ、そういうふうには、我々とイエス・キリストさまとは霊の血でつながっている。霊血、霊気でつながっている。2000年の経過がどうした、キリストは今日も明日も次の日も変わり給わない。今も生きておられる。だからこの集會が出来るんです。ここにイエスが、御霊のイエスが居てくださるから。そうでなかったら、追憶の中に浸っている、そんな嫌ですよ。イエスは、

「今日も明日も次の日も変わり給うことなし。我は次の日も進みゆくべし」

と、盛んなるイエスがこの集會の中に立つてくださっている。そのように本当に信頼して、

「主さま、御業をなしてください」

と祈る。我々は先ほど私が紹介したように少数派です。日本の中ではクリスチャンは異端です。そのクリスチャンの中で、私たちは更に異端、少数派、吹けば飛ぶような存在です。でも、

「いこのともがら黙さば、石叫ぶべし」

と、あなたはおつしやつたではありませんか。だからこの石ころみたいな我々、その中にあなたがお宿りくださって、石ころはダイヤモンドよりも素晴らしいものに変貌しました。

「主さま、どうぞお願い致しますよ、貴方の御栄光を顕してください」

と祈る。我々は大胆に祈れるはずですよ。

「私の言葉があなたに留まっているならば何なりと祈り求めなさい」(ヨハネ

15・7)

ヒルティは『眠られぬ夜のために』の中で、

「あれは最高の言葉です。これが本当ならば、もう怖いものなしだ」と言っています。

### ●わが愛に居れ

ヨハネ伝15章のはじめは、葡萄樹と葡萄の枝のところですよ。葡萄樹と葡萄の枝、これは枝が本体から外れたらもう使い物にならない、せいぜい燃やされるだけだよ。

「人々、これを集め火に投げ入れて焼くなり」



ところが、本当にキリストと一つになってごらん、霊なるキリストと一つになってごらん。

「何にても望みに随したがいて求めよ、さらば成らん」(15・7)

「私がそれを為そう」という。小池先生の、「汝れわがうちに」の讚美歌「召団讚歌A10」に、

「祈り求めよさらば成るべし」

とあります。

(註 A10 「汝れわが衷に」(1980/2/7 作))

- 1 「汝れ我が衷うちに しかと宿りて 祈り求めよ さらば成るべし。
- 2 み父のわれを 愛する如く 汝を愛す わが愛に居れ」。
- 3 キリストのため 生命いのちを賭けて 人を愛せん み霊たまは助く。
- 4 「汝れは愛なり 愛の炎ぞ！ 聖霊みたまの愛を 貫き生きよ」

この讚美歌を明日の晩に歌いますけど、それがここにあります。

「なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に

居れ」(15・8)

この15章は本当に素晴らしいところです。まあ、こういう15章を常に背景に置きながら、キリストがその前のところで色々語ったりなさったりしておられる御業を我々が受けとるときに、14章、15章、16章をしっかりと受けとって、その中で読んでいくというのが非常に為になる、有益だと思います。

ですから、我々は聖書読むときでも、いろんな物があちらこちらから集まって来るんです。ガリラヤ湖というのは小池先生が昔「ハレルヤ」誌の37号に書かれています。そこには、旧約の流れは全部ガリラヤ湖に集まる。ガリラヤ湖から今度は新約聖書の流れが使徒たちを通じてこの世に流れていく、イエスはガリラヤ湖である。ハレルヤ誌の37号(1974年8月号、「ガリラヤ湖」)です。京都召団にもちゃんと保存してあるはずですよ。

そういうことで、私たちはこのヨハネ伝を読むと言いますが、それを常に現在のものとして、しかも、あなたに対してイエスは何を語っておられるか、あなたの中でどういう御業をなさろうと為さっているか。決して「私なんか」と言わない、

「なんじら我を選びしにあらざ、我なんじを選びたり。而して立てたり」

と、ちゃんと向こうは宣言しているんです。私たちはうやうやしく「ははーっ」と言っていたかどうか。

イエスキマという方は本当に私たちと一緒に進んでくださる。今日、召団讚美歌A1「わが道みちづ伴れ」で歌いましたでしょ。

1 わが道みちづ伴れ わが情け わが旅路しよの主よ

なやみにも 苦しみにも わが力の主よ！

2 わが道伴れ わが情け わが天路の主よ



山を越え 谷を渡り 階に進みたもう！  
天路というのは、先程の霊の次元ですね。

3 わが道伴れ わが情け 世の救いの主よ  
わが身をも わが魂をも 捧げつつ進まん！

捧げざるを得ない、このキリストの生命がけの愛に出会ったら、「クリスチャンはこうしななければならぬ」なんて、そんな律法の世界ではない。「せざるを得ない」ということ。「わが身をもわが魂をも捧げつつ進まん！」と、これに徹することです。

4 わが道伴れ わが情け 旅路の峠を  
幾たびも 越えに越えん 天翔ける日まで！

小池先生は、70歳を超えたらいつも、「何々の峠にて」といった講演をなさるんです。「八十路の峠にて」とか。「八十八の峠」とか、幾つも峠があつて。私はそんなこと言いません。「永遠の青年ですから」なんて(笑)。小池先生は楽しく話をされました。だから私もだんだん楽しく話ができるようになってきました。

### ●「ジュニア」で生きる

そういうことで、皆さん、福音は喜びのおとづれでしょ、福音は楽しいものなんですよ。グッドニュースなんです。

「グッドニュースって何、何？ 宝くじ当たったの？」  
と聞かれたら、

「違う違う、もつとすごいもの」

なんて答えて、そのくらいクリスチャンは明るくニコニコとしてなけりや。内側からそれがふつふつと沸いてくる、そういう姿でありたいです、願いとして。

私なんかペシミストで、将来の事ばかり心配して、過去の事を思うと後悔ばかりするし、先の事を思って心配ばかりして、現在はペチャンコで何も無い。それがキリストを知る前の過去の私だったんです。だから私は、

「永遠の生命なんかいらん。現在、今、充実して生きられたらそれで結構です。そんな永遠の生命、そんなすごいものは結構ですから、今を活かしてください」

と。これが私の願いだったんです。そしたらキリストは、  
「永遠の生命をやるよ」

なんて、願ってもいないものをくださったんです。私は今、有難く戴いています、ほんとに。だからくたばりませんよ、少々背中が曲がっても。

しかしながら、そんなふうに皆さんも、それぞれ肉体的にもお仕事のにも環境的にもいろいろ大変なことがあると思います。でも、それに負けない。

「こんな境遇だからダメだ」



という、そういう言い訳は一切、この福音、キリストの前には成り立たない。

「にもかかわらず、どっこい」

と、ドイツ語で「ドッホ」(doch)と言うんです。どっこいと。だから皆さん「ドッホ」でいきましよう。私もだんだん冗談が過ぎるようになってきました。しかし、明るく楽しくにこやかに、元気よく、胸を張って皆さんどうぞ進んでくださいね。

それでは、今回はここまでという事に致します。

(講演録『人新たに生れずば』2022年4月17日発行より転載)

